安日彦の本拠地を探る

東京都港区　　安彦　克己

はじめに

古田武彦は著書『真実の東北王朝』で安日彦王・長髄彦副王は筑紫から“稲作の伝来者”として東日流に移ったと主張し、２０１１年の八王子セミナー「古代史自由自在」での講演では要旨次のように話された。

「『東日流外三郡誌』（『和田家文書』のこと―筆者注）では安日彦、長髄彦という兄弟が筑紫から東日流へ行ったというのが一つの歴史の基本だ。ところが秋田孝季はその解釈で、『古事記』『日本書紀』の長髄彦とイコールで結び、神武との戦いに敗れた長髄彦と同一人物として語り始める。私見では、『記・紀』には長髄彦は出現するが兄の安日彦は一回も出てこない。位取りは兄の安日彦の方が主であるから『記・紀』が毎回書き忘れたことになる。あり得ない。名前が同じで全く別人である。」

“二王の本拠地はどこか”このテーマはその後のセミナーでも度々議論された。長髄彦の本拠地については『和田家文書』（『文書』）から見出した史料４０本は、北胆駒鳥見（富雄）郷、現奈良県生駒市南田原町の白谷としている。明治期に「長髄彦本拠」の碑が同地区おばたけの畑中に立てられたが、宅地造成が進み現在は白谷垣内（集落）会館の前に移されている。『和田家文書』とは無関係の現地伝承がこの『文書』と一致した事から、筆者は弟長髄彦の本拠地は白谷であると比定した。（注１）ならば兄王安日彦の本拠地もこの『文書』は正鵠をとらえているのではないだろうか。

一　白山神の伝来を考える

安日彦の高祖、耶馬止彦が奉じた白山神の日本伝来経路から解き始めよう。

『和田家文書』にはブルハン神とも云われる白山神が日本列島に伝来した経路を示す史料は大凡７０本ある。紙幅の都合上、史料をまとめると、新疆ウイグルのウルムチ→天山天池→西安の太白山→朝鮮族の聖地白頭山に到達した。

時には砂嵐の影響もあったと記す。白頭山から金剛山と朝鮮半島に拡散していった。

また、別ルートではバイカル湖から満達（大興安嶺の東方より沿海州にかけての地域か）を経て朝鮮半島へ到達した。東岸の三陟、蔚珍、長鬐、釜山から犀川河口湊（大野湊）に到り加賀の三輪山、白山へと伝播した。（注２）

次に『和田家文書』以外の白山神伝来の論文を示そう。

『海を渡った白山信仰』（注３）に紹介された崔南善（注４）の「不咸（ブルハン）文化論」だ。この論旨を箇条書きにする。

〇朝鮮半島には、白（朝鮮音ペク）の字を名前に持って居る山が、夥しく存在している。最北最著の白頭山を始め長白、祖白、太白、小白、鼻白、旗白、浮白、もしくは白雲、白月、白岩、白馬、白鶏、白華等で、転注仮借と認めれば、山岳の幾割ともなる。特に長大なる山彙、峻高なる山峰に白の名称の付いているのは注意を惹く。〇ペクは光明、古義は

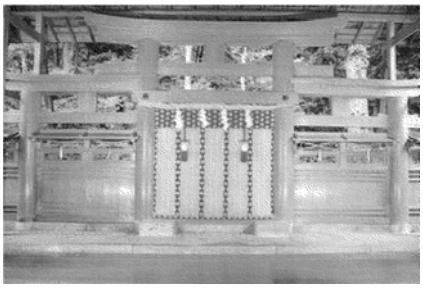
神、天、日を意味する。加賀の白山はペクサン。〇不咸文化の中心はペク。「不咸」は最古の字形。〇天山を白山とも云う。〇黒海周辺は不咸文化の発祥の地。〇伯耆国（伯は白、耆は髻の仮借文字）には波波伎神を祀る。等々。この論文は、先の『和田家文書』の伝播経路史料を裏付けている。

二　三つ鳥居（三輪鳥居）

根岸榮隆著『鳥居の研究』（注５）は三つ鳥居について

「大和大神神社は古来神殿がない。三輪山を以て神霊鎮座の霊山として拝殿があるだけなのだが、山と拝殿の境に三つ鳥居を立てている。三輪鳥居とも云う。」

と記している。大神神社の社記には三つ鳥居について「古来一社の神秘なり」として説明していない。また、同社の北、山辺の道に沿って同じ三輪山を霊山とする檜原神社にも三つ鳥居がある。（注６）



（大神神社）

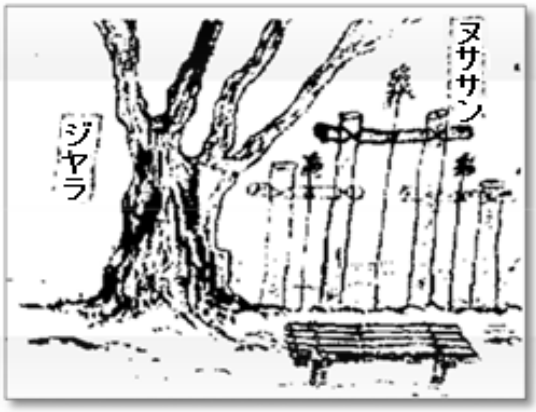
（檜原神社）

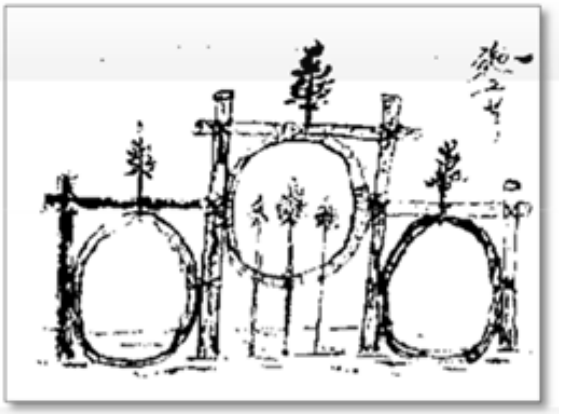
根岸の解説は、『和田家文書』のスケッチ「荒覇吐王宮坂東之遺跡駿河安倍川在郷」の実状とも整合する。（注７）遠望に富士山が見え手前には三つ鳥居が描かれている。静岡市の西を安倍川は流れ、北街道沿い沓谷の愛宕山麓には朽ちた三つ鳥居があり「上代祭祀で山霊を拝する処」の掲示がある。

（静岡市沓谷の三つ鳥居）

三　三つ鳥居と荒覇吐神

『和田家文書』には荒覇吐神の原始的なヌササン（神壇）が描かれている。ジャラの木を前にして鳥居状の丸柱に袖柱が付く三つ鳥居の前段階の様子と、三輪くぐりが描かれている。（注８）





左図では、左側に神域不踏之三鳥居イナウ」とあり、右側に「イシカホノリガコカムイ」とあり、３本のイナウには〇天△地―水の三神を表し、神像を中央に左にはブルハン神、大神神の蛇像が描かれ、右には陰陽石が配置されている。（注９）「神域不踏之三鳥居イナウ」とあるように、自然神信仰の荒覇吐神には大神神社と同様社殿はなく、三つ鳥居で神域を隔てている。

『文書』にある右のスケッチ「犀川三輪山」では、犀川上流に円形の三輪山と奥の白山を望み、犀川左岸に三つ鳥居が描かれている。（注１０）

描かれた現場は、霊峰白山を遙拝する加賀三輪山を眺望でき、犀川の流れの類似性から、中流の辰巳地区にあったであろうと推定した。

次に、金沢市の中心部にある旧県社石浦神社の『式内社調査報告』（注１１）には、「式内社の三輪神社で、古来石浦山王・山王地主権現と呼ばれた。祭神は大物主命とされる」とある。

当社の長谷吉憲宮司は「古い時代には三つ鳥居はあった。現在は大神神社の末社になっているが、こちらから大和に移った。三輪信仰は中東で発祥し、バイカル湖の神となり天、地、水の神となり、海を越えて石浦の地に鎮座した」と。

前述した伝播経路と同じことが社家の中で相伝されていた。また「古来、犀川は大物主川といい、両岸には三輪族が住んでいた。数多ある日吉神社はその証拠」とも。犀川は才

川・西川とも書き、本来は齋川だったと知れた。

四　加賀から大和へ

長谷宮司と同様、『和田家文書』も白山神は加賀から大和三輪山に移ったとする史料は１０本ある。まとめるとルートは次のようになる。

犀川上流三輪山→加賀白山→美濃白鳥→長良川→尾張→伊賀→宇陀川→耶靡堆蘇我郷三輪山（注１２）

加賀の白山から岐阜県側の美濃白鳥に出て長良川を下るルートで、白鳥町長滝白山神社は美濃地方各地に分布する白山信仰の中心的な社である。

白山毗咩神社が明治期の『神社明細帳』から調査した白山社の県別分布図を右に挙げる。岐阜県で５２５社、福井県の４２１社と飛び抜けて多く、次が愛知県の２２０社、一方５０社以下の県は３３県と分布は明らかにばらつきがある。この分布数は大和へのルートの証左となろう。

五　耶馬止彦は安日彦の高祖

『和田家文書』では白山神を大和に移したのは安日彦の高祖耶馬止彦であるとしている。耶馬止彦から安日彦までの系図については、三春藩主、秋田子爵家の公式家譜『秋田家系図』では元祖・耶馬止彦、次いで明日香彦とつづき五十三代は安日彦と弟王長髄彦とあり、「右五十三代を以て、故地を放棄して東日流に移る」とある。（注１３）

『和田家文書』には耶馬止彦に関する史料を２５本見出し、まとめると「耶馬止彦は犀川の三輪山を出て大和に入り耶靡堆国＝耶馬臺国を建国した初代の王。三輪山で即位し箸香郷蘇我里に王居を構え、国土を拡げ１８０国を統一した。古来からの神＝白山神を荒覇吐神と改めた。（遺骸は）箸墓に再葬された。」となる。（注１４）史料から、耶馬止彦王は白山神を奉じて大和に移り、“本拠を三輪山蘇我郷とした”と集約することができる。

六　安日彦の本拠

『和田家文書』には安日彦の本拠地を記す史料１９本あり、次に挙げる。（注１５）三輪山、三輪郷蘇我、蘇我郷、明日香（飛鳥）安倍邑、明日香蘇我郷、箸香蘇我郷　地図に落とすと三輪山の裾懐あたりに集約できる。この地は（五）で述べた初代耶馬止彦の王居の

地と重なり、代々同地域に居住し統治したことになる。現桜井市阿部には安倍廃寺遺跡があり阿部の文殊院があり、その境内神域の最奥に白山神社が鎮まる。

以上から安日彦の本拠地は、三輪山を中心にして北は檜原神社、東南は裾を流れる大和川（＝初瀬川があり、長谷寺は石浦神社宮司長谷氏と同族）地域で、『文書』でいう安倍邑、阿部辺りまでの地域であろう。弟長髄彦は先に比定していた鳥見白谷を本拠に大和地方を分割統治していたと理解した。

この論稿から、高祖耶馬止彦が築き、代々受け継いだ邪馬臺国を、筑紫から侵入してきた日向の賊佐奴との戦に敗れ、安日彦王、長髄彦副王は一族を率いて東日流に向かったとする歴史が見えてくる。古田先生にご報告したい。

（注　１）東京古田会ニュース第１４７号　２０１２年１１月　拙論
（注　２）主な史料に、『北鑑』　第３７巻　「異説白山神由来」
（注　３）前田速夫著　現代書館　２０１３年
（注　４）昭和２年　朝鮮思想通信社発行。歴史学者、文学者で崔八鏞の名で３・１独立宣言を書いた。
（注　５）根岸榮隆著　厚生閣、１９４３年／第一書房、１９８６年
（注　６）檜原社からは春分秋分の日、二上山の窪みに入陽が落ちる。古い姿だ。
（注　７）『総輯東日流六郡誌全』１２４頁「王政処移宮之抄史」
（注　８）『和田家資料１』１５０頁「神事極秘帳」
（注　９）『総輯東日流六郡誌全』１０３頁「荒覇吐族之国神」
（注１０）従来の三輪山は犀川上流、挙原山と水葉山の中間に美濃輪山として表記されている。明治期陸軍省が誤記したため、今の三輪山は手取川上流にある。
（注１１）『式内社踏査報告』第１６巻　式内社研究会編纂、皇學館大学出版　１９８５
（注１２）主な史料に『北鑑』第１０巻。『和田家資料３』２３１頁
（注１３）『北鑑』３８巻では三代、同１７巻では七代、同２０巻では十八代とある。
（注１４）主な史料に『東日流六郡誌大要』２１５頁「耶馬台国誌」
（注１５）主な史料に『東日流六郡誌大要』５４８頁「中祖之事」